

GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 49

国境を越えて、豊かな人文知の視点で社会を見る

額定其勞(KHOHCHAHAR, Chuluu E.) 准教授 × 池亀 彩(IKEGAME, Aya) 准教授 対談

国境やディシプリンの隔たりは関係なく、地球や学問の世界は繋がっています。国際経験の豊富な額定其勞先生と池亀彩先生へ、言語についてや研究の方法論、学環への期待などについて伺いました。

——最初に、研究テーマについて教えてください。

額定其勞: 三つのテーマについて取り組んでいます。前近代アジアにおける裁判の比較研究、帝国と正義、そこでの民族の多様性、それからモンゴルの法と歴史です。歴史に主眼を置いていて、正義や法と社会との関係について、原典資料を読みながら研究しています。

池亀: 専門は社会人類学で、調査地は南インドです。最近「グル」と呼ばれている宗教リーダーについて調査しています。彼らは紛争や争いを解決する法廷を作っていて、インフォーマルな「法」や「正義」のシステムに関心があります。その前はマハラジャの研究をしていて、帝国下における小さな権力のあり方というか、イギリス帝国とインドにもとからある権力との補助関係などをみていました。他にも差別の問題、これは深い意味での宗教、例えば「けがれ」という概念をインドと日本で比較するというのもしています。

——お二人とも多数の言語を操り、多様な国や地域での生活、研究経験があります。

額定其勞: 一つの言語は一つのロジックですね。新しい言語を勉強することで、考え方を多様にできる、思考を豊かにすることができると個人的には信じています。例えばスペイン語が分かった場合には、スペイン語で書かれた専門書が読める、それによって学問の幅も広がる。現地の文化や背後にある思想もより分かるようになり、学者にとっては大きな財産だと思います。

池亀: 親戚の遠縁のおじさんで、13ヶ国語くらいできた人がいたんです。数学者なんですけど、そこが標準になってしまって、4、5カ国語くらいでは褒められたこともないし、10以上いかないと(笑)言語を学ぶことは、その国の文化を学ぶことでもあるので、喋れるとそこの人にちょっと近づけるような感じがあります。

額定其勞: 人類学では大事ですね。

池亀: そう、人の話のリズムを崩させない、っていうんですかね。調査のときでも、珍しい言葉であればあるほど、「自分の言葉をそんなに勉強してくれたんだ」って、初めの一步としてポジティブな関係性ができる。

——方法論や学際的な研究についての意見を聞かせてください。

額定其勞: 人類学の私のイメージは、パワフルであっちこっち行って、なんでもできるという。

池亀: そのよさですね。でも、それが逆に悪さでもあって、これが人類学ってないんですよ。唯一人類学しか持っていないのって、親族研究ぐらい。そこは他の分野の人はやってきていないことだと思いますけど、あとのことは社会学の人もやるし、歴史や法学の人だって人類学的に文化とか社会をみている。

額定其勞: 社会のなかで社会学とか法学とかでは対象にならない、周縁化されたところをみて、調査して、記述する。そういう部分も人類学の貢献できることだと思います。あとは個人の人を対象とすることも多いですね。



額定其勞: テーマや目的をきちんと設定すれば、アプローチのしかたはどちらでもいいと思います。法学っていうのは、自分のフィールドがしっかりあるから、完全にその理論に寄りかかるとその中からなかなか出られない。その逃げ道として法社会学や法人類学があって、特に人類学の方はモラルや規範も法として扱う、とても広い「法」です。

池亀: 南アジア研究って、特に人類学、歴史学、社会学の人と一緒にやってきている伝統みたいなものがある。それに宗教学、ポリティカル・サイエンスの人とかも。多分野の人というものは比較的普通のことというか、結構話が通じる。それがひとつ地域研究の利点、強みかなと思います。

——趣味について教えてください。

額定其勞: YouTubeでドキュメンタリーを見ることですね。最近見ているのは北アメリカの野生の馬や、オーストラリアのらくだについて。昔はサッカーをやっていましたが、最近は全然やっていません。

池亀: 編み物、歌舞伎、着物を着ること、書道、写真、いろいろやっていますね。とくに編み物で靴下を作ること、歌舞伎は観ながら死にたいくらい好きです。

——学環の将来についての期待などを教えてください。

池亀: 英語でもっと発信していくと学環の可能性がさらに広がりそうです。

額定其勞: そうですね、日本の研究者は国内のマーケットに満足してしまう傾向があると思います。人口も、大学も多いですね。

池亀: あと、もうちょっと理系の人にも文系のことに興味を持ってもらいたいなと感じます。理系の人でも、今の社会でこういうものが必要だからこういうことをしたらどうだろう、というものがあるわけですね。当たり前だと思っていることが韓国に行ったら全然違う、インドに行ったらもっと違うとか、そういう柔軟性というか、「今」というものの理解の多層性をほんとは歴史とか社会学とか地域研究っていうものが教えられるはずだと思うんですけど、なかなかそういうふうになっていない気がしています。

「ヒューマン オーグメンテーション (人間拡張)学」 (ソニー寄付講座)



2017年6月1日、福武ラーニングシアターにてソニー株式会社による寄付講座「ヒューマンオーグメンテーション(人間拡張)学」の第一回セミナーが開催されました。情報学環教授の暦本純一が提唱するヒューマンオーグメンテーションのコンセプトについて3名の識者による講演およびパネルディスカッションが行われ、学生や社会人を合わせ200名あまりが参加しました。

ヤフー株式会社安宅和人氏による講演では、AIによる単純労働の自動化が進む中で人間が為すべきことについての示唆から、ヒューマンオーグメンテーションという概念の重要性が強調されました。また東京工業大学伊藤亜紗准教授からは、障害を持つ方々がどのような感覚を持っているかについての研究内容をまじえ、私たち人間のもつ感覚の面白さについての講演が行われました。同講座の味八木崇特任准教授による報告では、ヒューマンオーグメンテーションに関わるこれまでの研究実績や最新の成果についての紹介がなされました。パネルディスカッションでは情報学環教授の暦本純一も参加し、3名の講演内容をふまえて人間拡張という分野の今後の動向や、研究の役割について議論が交わされました。

(修士課程:城 啓介)

情報社会基盤 卓越講義 シリーズ



国境を越えて進むデータの寡占化、ソフトウェア化による通信基盤の輸出、特定の国家による価値の保証を持たない仮想通貨など、情報社会基盤技術における地球規模の覇権争いが進むなか、情報学環では2016年度、文理越境の観点から情報社会基盤技術の最新動向の把握が必要であると考え、本分野における卓越大学院教育プログラムの設計を開始しました。

「情報社会基盤卓越講義シリーズ」はその実践として、2016年度2月から3月にかけて国内外の著名な情報社会基盤技術の研究者を招聘し、全14回の集中オムニバス講義として開講されました。本講義シリーズでは、受講者を学内だけでなく一般からも募り、パイロット講義という位置づけのもと受講者のフィードバックを得ることを目指していました。結果として、学内だけではなく、一般も含める聴講者の全員から卓越講義を再度受講したいという強い要望をもらうことができ、卓越大学院教育プログラムが学内外において意味のあるものになり得ると確信しました。2017年度後半に正規の講義科目として開講することを検討しています。

(教授:中尾彰宏)

メディアと 表現を考える シンポジウム



2017年5月20日、「第1回メディアと表現について考えるシンポジウム『これってなんで炎上したの?』『このネタ、笑っているの?』」が東京大学福武ラーニングシアターで開催されました。テレビ番組やネット動画上にみられる性、容姿、年齢、独身者などのマイノリティに関する「炎上案件」や「ネタ」について、メディアの制作者、研究者、弁護士らパネリストと会場が熱い議論を交わしました。

ご登壇されたのは小島慶子さん(エッセイスト)、竹下隆一郎さん(ハフポスト日本版編集長)、白河桃子さん(ジャーナリスト)、羽生祥子さん(日経DUAL編集長)、加藤美和さん(UN WOMENアジア太平洋部長)、大澤祥子さん(ちゃぶ台返し女子アクション)、田中東子先生(大妻女子大学)、緑川由香先生(弁護士)、司会は林香里先生(情報学環)でした。詳細は、丹羽美之研究室ブログ(<http://media-journalism.org>)の記事「炎上から始まる対話」をご覧ください。

(博士課程:瀬尾華子)

Actiii_lunch 学環 commons で ランチを囲む



2017年4月19日、第1回のActiii_lunchを開きました。Actiii(アクティブ)とは「学際研究を促進するために情報学環のリソースをアクティブしていくこと」を目標としたプロジェクトです(詳しくは<http://actiii.net>をご覧ください)。プロジェクトの一環として開催するActiii_lunchは、情報学環の先生方と学生たちが学環 commons で昼食を囲むことで、カジュアルな雰囲気のもとで交流を促す目的があります。

今回は、学環長でもある佐倉統先生にお越しいただきました。集まった参加者には博士課程の学生から、たまたま都合のついた学環教育部OBの方もいらっしゃいました。昼休みの1時間ほどのあいだに、情報学環・学際情報学府をどうやって盛り上げていけるのかという話題で話がはずみました。

例えば、今の学環は先生ごとに研究内容の独立性が高く、隣の研究室が何をやっているのか分からなくなりがちなため、学生たちがどこで研究室やコースを横断して、学際的な交流をすることができるのかについて。ほかにも、最近注目している研究者を佐倉先生と学生のあいだで紹介しあうなど、興味深い会話の続く時間となりました。

(博士課程:杉山昂平)

平成28年度大学院学際情報学府学位記授与式

2017年3月23日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の学位記授与式が行われました。修了者の修士課程62名、博士課程5名に佐倉学府長より学位記が授与され、その後、優秀修士論文発表会が開催されました。学府長賞・各コースの専攻長賞については、学環学府ウェブサイトの記事「平成28年度大学院学際情報学府学位記授与式」(2017年4月13日掲載)をご覧ください。

平成29年度大学院学際情報学府入学式

2017年4月3日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の入学式が行われました。修士課程78名、博士課程16名の入進学者に対して佐倉学府長から祝辞が送られ、その後入学ガイダンスが行われました。

平成30年度学府入試説明会

2017年6月10日、平成30年度学際情報学府入試説明会が福武ホールで開催されました。366名の受験生が集まり、熱気に包まれた会となりました。詳細は学環学府ウェブサイトの記事「平成30年度学府入試説明会開催報告」(2017年7月7日掲載)をご覧ください。(学務係)



PEOPLE

着任教員自己紹介



HAUTASAARI ARI MARKKU JUHANI 助教

フィンランドのオウル大学と京都大学情報学研究所で学び、NTTコミュニケーション科学基礎研究所を経て情報学環に参りました。研究テーマは、「多言語・異文化」に関する問題を機械翻訳・音声認識などの技術を用いて解決する事です。非母国語者の対話能力を高めるだけでなく、「感情」が正しく伝わる事を目指して、HCI分野で頑張っています。



佐藤宏樹 准教授

流動教員として薬学系研究科から参りました。医薬品は様々な情報を内包しており、使う中で新たな情報も生じてきます。医薬品に纏わる情報を対象に、薬学的観点だけでなく、情報学環では他の自然科学や社会科学の視点からのアプローチで、医薬品適正使用・育薬のための研究を行いたいと思います。



濱田健夫 助教

豊橋技術科学大学から参りました。コンピュータとの接し方を探る、ヒューマンコンピュータインタラクションを専門としています。他人に意図を伝えることさえ困難な中、コンピュータや機械を思い通り操作するために、自身の身体のように扱える入出力装置の研究を行っています。



住友貴広 准教授

前職の総務省では、情報通信政策、技術政策、電波政策、放送政策等の企画立案に携わり、出向先のNICTでは、研究開発テストベッドネットワーク(JGN)を運用し、SINETと連携して、IOTを含む様々なネットワーク実証実験を推進してきました。今後は、IOTやオープンデータを活用し、様々な業界での情報の利活用を進めたいと考えています。

人事異動

3月31日

定年退職 坂村 健 教授
上田 博人 教授

任期満了 酒井麻千子 助教(特定短時間特任助教へ)
岩澤 駿 助教
野澤俊介 特任准教授
阿部卓也 特任講師
Khan M. Fahim Ferdous 特任講師
定池祐季 特任助教
角越和也 特任助教

4月1日

再配置(転出) 園田茂人 教授(東文研へ)
真鍋祐子 教授(東文研へ)
堀 里子 准教授(薬学部へ)

配置換(転入) 石田英敬 教授(総文より)
池亀 彩 准教授(東文研より)
額定其劣 准教授(東文研より)
佐藤宏樹 准教授(薬学部より)

採用 Hautasaari Ari Markku Juhani 助教
濱田健夫 助教
片田敏孝 特任教授

昇任 池尻良平 特任講師(特任助教より)
味八木 崇 特任講師(特任助教より)

5月1日

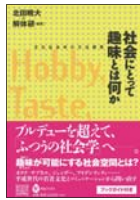
採用 住友貴広 准教授
昇任 竹田恵子 特任准教授(特任助教より)

8月1日

採用 松原妙華 助教



大学4年間の統計学が10時間でざっと学べる
倉田博史 著
KADOKAWA, 2017年7月



社会にとって趣味とは何か
北田暁大／解体研 著
河出書房新社, 2017年03月



大地震・火災・津波に備える 震災から身を守る 52の方法 [改訂版]
レスキューナウ 編集
／目黒公郎 監修
アスコム, 2017年03月

KADOKAWAでは人気のシリーズとなっているということで執筆のお話を頂き、書いたものです。統計学に限らず、学問はノートを取りながら写経をしながら身に着けるのが一番確かな学び方ですが、ビジネスマンや他の分野に進んだ方(学生を含む)にとっては現実的ではないと思われる。そのような「御用とお急ぎの方」向けに統計学の要点をまとめました。

文化社会学の領域で重宝されているものに、P・ブルデュエの卓越化の理論がある。本書では、その理論の適用可能性を批判的に検討し、様々な趣味の場の固有性の分析を目指す。マンガ、アニメ、読書、音楽、ファッション…それらははたして同じ意味で趣味と言えるだろうか。計量分析の結果を踏まえつつ、理論的かつ実証的に分析する。

首都直下地震や南海トラフの巨大地震などの発生が危惧される中で、あなたの防災の常識は間違っていないですか？東日本大震災や熊本地震の教訓を踏まえ、地震、火災、津波に備え、皆さんに知っていただきたい「もしものとき」の新常識が満載です。この本で、自分、そして大切な家族や仲間を確実に守っていただきたいと思います。

TOPICS

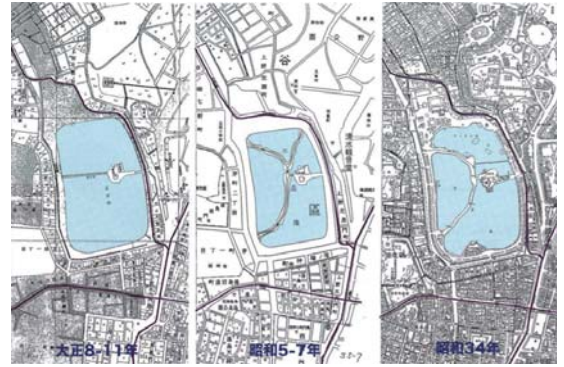
しのばずプロジェクトで仲町調査

吉見俊哉研究室と凸版印刷株式会社の共同研究「しのばず文化資源活用プロジェクト」は、地域の文化資源発掘の取り組みの一環として、上野池之端仲町通り商店街を対象として調査を行いました。文京区と台東区にまたがるこのエリア(上野二丁目、湯島三丁目)は、現在風俗店が集中し、治安や風紀が懸念されていますが、組紐道明をはじめとする10軒以上の老舗や、湯島天満宮、鈴木演芸場、横山大観旧宅・記念館も近くに点在するなど、歴史を感じられる地域でもあります。

今回の調査は道明(組紐)、心正堂本舗(画材・書道具)、堺屋酒店(酒・タバコ)などの店主の方々に協力をお願いし、堺屋酒店(1880年以前に創業)、十三や(1736年に創業)、千代本(置屋を経て1965年に開業)へインタビューを実施しました。過去に花柳界で賑わっていたこの地域には、「関東大震災までは銀座よりもいいお店が沢山あった」ものの、昭和30、40年以降に花柳界が衰退していくなかで老舗の立ち退きと風俗店の進出が進み、現在の街並みが形成されるに至ったという地域史が語られました。

また、調査のなかで現東京国立博物館や美術学校(現東京藝術大学)と関わりのある美術家たちがこの地を訪れていたエピソードも多く出ました。横山大観や伊東深水が界隈を頻りに訪れていたことや、小糸源太郎の実家が池之端の料亭だったこと、組紐道明がかつて美術学校関係者のサロンとして機能していたことなどが明らかになりました。

(博士課程：潘夢斐、逢坂裕紀子、修士課程：サム・ホルデン)



地区の変遷、2016年12月5日「上野・湯島の魅力を世界に！上野スクエア構想シンポジウム」配布資料



『建築世界』vol. 23, 1929.06号で取り上げられた堺屋酒店



堺屋酒店の店主



十三や店主

情報学環オープンスタジオ オープニングレセプション

2017年4月20日、情報学環本館地下1階に新しく竣工された情報学環オープンスタジオのオープニングを祝うレセプションが行われました。レセプションにはオープンスタジオへの寄付者である中山隼雄氏および佐倉学環長を含め、30名ほどの参加者が集い、関係者からの挨拶やスタジオの設備の見学を兼ねた懇親会がなされました。参加者たちはスタジオにあしらわれた仕掛けに興味深く見学したり、スタジオの使用方法に関して意見を出し合ったりしながら、親睦を深めていました。

オープンスタジオは、ゲームや遊びに関するワークショップやイベントを開催するための多目的なスタジオとして、日本のゲーム業界を支えてきた中山隼雄氏の寄付によって設立されました。現代の子どもたちを未来のエンタテインメントの創造者として育成し、日本のゲーム業界をさらに盛り上げたいという中山氏の意向に沿うべく、今後このオープンスタジオをプログラミングやコンテンツ作りを楽しみながら学べる場にしていけるよう、スタッフ一同精進して参ります。

(特任研究員：阪口紗季)



<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

あとがき

Alpha GOが囲碁の世界チャンピオンに勝利し、AIが人間の知能を凌駕するのはいつかという議論が続いています。

その一方で、コンピュータと人間がチームを組んでテニスのダブルスのように協調してプレイする囲碁の試みも始まっています。

Alpha GOの棋譜には人間の発想からは出てこない指し手も発見され、その研究が碁の世界を広げようとしています。

人間 vs. AIという構図から、人間の知を拡大するためのAIへ。学問の方法論にも大きな影響を与えていくでしょう。(暦本純一)

GAKKAN 49 9. 2017

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 暦本純一、水越 伸、David Buist、岡田美保、川上 玲、Pan Mengfei、鳥海希世子

デザイン: MARUYAMA DESIGN 丸山智也